

第27回

日本癌病態治療研究会ご挨拶

第27回日本癌病態治療研究会当番世話人
千葉県がんセンター研究所 所長

永瀬 浩喜

春光天地に満ちて快い時候、皆様ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。平素は格別のご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。

この度、第27回日本癌病態治療研究会を平成30年5月31日および6月1日、ホテルポートプラザちばにて開催させていただくこととなりました。現在、関係者一同、鋭意開催に向けて尽力させていただいております。研究会のテーマを千葉の地にちなんで「癌病態発見伝」とさせていただきました。滝沢馬琴の南総里見八犬伝から発想したことは歴然たるどころかと思いますが、馬琴はこの物語を完成するために、48歳から75歳までの半生を費やしています。私も48歳から千葉の地で癌研究を始めました。癌病態の発見からがんを克服できる日を夢見て馬琴のように長く研究に携われればと思いを馳せ、本会をスタッフ一同と一丸となって誠心誠意をこめ企画させていただきました。

本会では、5月31日にシンポジウム「分子腫瘍学研究に基づくがん治療法の開発」、パネルディスカッション「がん診断法の進歩」を開催、午後にランチョンセミナーとして千葉大学の塚将之教授、特別講演を東京大学医科学研究所の山田泰広教授にお願いし、アフタヌーンセミナーとして熊本大学の馬場秀夫教授に、またイブニングセミナーとして大阪大学の森正樹教授にご講演をお願いし、最新のがん診断、治療法に関して基礎および臨床のお立場からご講演いただくことといたしました。6月1日にはシンポジウム「がんゲノム医療の現状と未来」、ワークショップとして「生命体ゲノム・エピゲノム構造普遍性への容喙そして俯瞰」と「浸潤・転移の分子機構とその制御」を企画しています。またランチョンセミナーでは、リキッドバイオプシーの新たな取り組みとゲノム診断について企業からのご講演をお願いしました。また

ポスター発表を両日議論いただけるよう一つにまとめさせていただき、31日にポスターセッションの発表を行ったのち懇親会や休憩等の際にも議論の場が持てればと企画しております。

基礎と臨床が融合する研究のなかから恩師である熊本大学名誉教授小川道雄先生がおっしゃった「こころ 分子において メスを構えるべし」から、新たな発想が、そして基礎研究者には「こころ 患者において 分子に対峙すべし」といった考え方が芽生え、本会が新たな癌病態を解き明かす研究に広がっていく一助になればと思量させていただいております。また、本会では、竹之下誠一理事長および千葉県がんセンター山口武人病院長のご高配により、国際シンポジウムを研究会の最終日の午後から企画することを許可いただきました。本会とは別の会として開催いたしますが、終了後すぐに行うことで参加者が、連続的に国際的な癌研究にも触れる機会を持っていただければと企画させていただきました。カリフォルニア大学のアラン・バルメイン教授、ローズマリー・アカースト教授そしてアラバマ大学のケシャブ・シン教授に来日いただき、発がんゲノム解析、TGF β と免疫チェックポイント治療、ミトコンドリア異常とがんについてご講演をお願いしています。

日本からも、東京理科大学生命医学研究所炎症・免疫難病制御部門（元東京大学医学部分子予防医学教授）松島綱治教授に新しい免疫治療の取り組みについてのご講演をいただき、不肖代表世話人の永瀬も新たな癌治療についての発表を予定させていただいております。この国際シンポジウムにも研究会参加の先生方には、ぜひご参加いただければ幸いです。

不慣れな会の運営で、何かと行き届かないところもあるかと思いますが、研究所員一丸となって会の成功に向けて、日々頑張っております。さまざまな最新のがん研究を聞き、議論し、アイデアを持ち帰っていただくとともに、千葉の菓子メーカーにも協力をいただきましたので、千葉の味と千葉のひと時を楽しんでいただければ、幸いです。

末筆になりましたが、本会の運営企画にあたり多大なご指導ご高配をいただきました松原久裕先生、柴田昌彦先生そして前担当世話人の國崎主税先生に感謝申し上げますとともに、事務局で運営に携わってくれている筆宝義隆部長を始め研究所スタッフに深謝いたします。

(2018年4月)